

薬史学会通信

No. 9 1989年12月

〒192-03

東京都八王子市堀之内1432-1

東京薬科大学内

日本薬史学会事務局

急成長する日本薬史学会

— 早急な対応必至 —

右図は最近数年間の薬史学雑誌各巻ページ数の変化です。

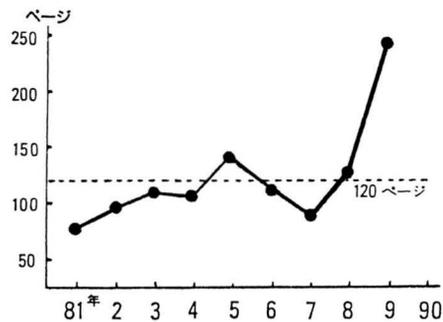
毎号60ページ年2回刊として、120ページの線を中心に推移して来ましたが、本年春以来投稿が急に増大し、遂に年予算350万円規模の財政を完全に圧迫するまでになってしまいました。

昨年「薬史学会通信No.8」に機関誌充実の必要が説かれましたが、たちまち達成の感があります。従来の投稿規定に依れば、刷上り1ページ当り投稿料1,000円となっておりますが、実際の印刷費用は1ページ当り1万円、差引9千円が会の負担となっています。

機関誌の発行は会の重要な事業であり、会の出費は当然であります。やはり限度があります。

次に、なぜ投稿が増えたのかと言え、最近、歴史など非実験系の研究が薬学の領域でも認められるようになり、学位論文ほか研究歴を評価する資料として使われるようになってきた事が挙げられます。これは甚だ喜ばしい現象で、遅ればせながら我国薬学の健全な発展の一礎石となって来たのであります。

そこで会としては、早急に対策を講じなければならなくなりました。具体的には90年4月の総会に於て、投稿規定の改訂という形で表われますが、現在考えられている骨子は：



- (1) 投稿料については、従来の方式に依りつつも、一定の範囲を超えた分の印刷費用実費は著者負担としてもらう。
- (2) 雑誌発行のために本会の事業として予算化するのには年120ページ分とする。
- (3) 従って投稿後印刷までに日時を要する場合も出現するので、特に発表を急ぐ希望のある場合は、印刷費実費を前提として「特別掲載」の制度を導入する。
- (4) 原稿が多数あった時は、年3回刊とする道も開く。

大体以上の通りであります。(1)の一定の範囲とは、原報8ページ、ノート2ページ、史伝・史料・総説6ページ、雑録2ページを想定しております。正式には次年度総会の席上提案され、議決することになります。

【会務報告】

○'89年度評議員会

89年4月5日、名古屋工業大学における日本薬学会第109年会・薬史学会開催に合せ、昼食を供にしながら89年度評議員会が開かれました。

席上、野上会長は次のように挨拶されました。

『平成元年度の評議員会に多数御出席下さいまして有難う御座います。私共は昨年4月の総会で再選されて以来、引き続き会の発展に努力して参りました。会員数も今年2月1日現在で290余名に達し、会の会計にも若干のゆとりを生じて参りました。

昨年度の活動を御報告しますと、先ず4月5日に薬学会第108年会と合同の形で「薬史学会」の名の下に講演会を開催し、一般講演10題並びに「中国地方と医薬学」と題するシンポジウムを開催しました。又昼休みを利用して総会を開くことができました。10月19日には薬学会館で集団会を開催し、堀岡正義氏の「戦後の調剤学の変遷」と山川浩司氏の「有機薬化学の歩み」と題する御講演を伺うことができました。又「日本薬史学会文庫」も着々その充実に努めている所であります。

今年度の活動計画としては、先ず「薬史学雑誌」並に「薬史学会通信」の充実、そのための編集委員会の独立、強化を実施したいと考えています。次に学会活動の活潑化、その一助として「西日本支部」の開設を考えています。第3に会員倍增運動を展開したいと思います。学術会議では学会の会費が500人以上ないと一人前の学会として取り扱わず、学術会議の会員推せん権がありません。推せん権のことは兎も角、数の偉力は大きく、会の活性化には欠くことのできぬ要素であります。

われわれは既に290余名を擁しており、500という数は指呼の間にあり、会員諸君の御協力を得れば500人を突破することは夢ではあ

りません。皆様の御盡力を期待して私の御挨拶を終ります。有難う御座います』

評議員会への出席は総計35名でした。

○'89年度総会

同日午後13時より13時30分まで、同年会薬史学会々場において、本会総会を開催しました。

野上会長が上記挨拶と同趣旨の発言をされて議長席につき、前年度活動状況と会計決算の報告、次いで今年度事業計画とそれに伴う予算案が提出され、以上を一括して承認いたしました。(決算・予算については別表)

会長挨拶にもありましたように、本年度から会計支出項目に『事業費』の欄を新設し、支部の設立に向けての準備、学会活動の拡大へ向けての調査活動などが行えるようにしました。

当面は機関誌紙の充実ならびに会員の拡大(倍增)が重点項目として挙げられました。

現会員数として次の数値があげられました。

会 員 数 (年度当初)

	'88年	'89年
名誉会員	2	2
賛助会員	26	34
一般会員	237	246
学生会員	1	5
外国会員	4	4
計	270	291

○薬史学会集談会

10月17日、14時より東京理科大学薬学部10号館会議室で、次の通り講演と話題交換が行われました。

講 演：日本における公衆衛生学の経緯
撰南大学薬学部 高島 英伍氏
話題交換：西欧くすり博物館

東京女子医大 杉原 正泰氏
東京理大薬学部 山川 浩司氏

(7) 荘園体制下の受容

宗 田 一

古代律令制の解体過程で、法的に隷属的身分を解放された技術者群は、私的生産宮司(薬殿など)や摂関家・院・社寺などの荘園領主の私的工房に保護を求め、奉仕者としての身分を取得して生産に従事するようになり、ここに荘園体制下の生産機構がはじまる。

座 これら技術者は、名主等の系譜をもつ商工業者を加えて、やがて「座」という特権団体に発展する。つまり初期の座は、奉仕者としての集団的性格をもち、のちの南北朝の内乱前後から簇出する「新座」とは性格が異っていて、座の本所と人身従属的な関係をもち、神事・公事に勤仕する義務をもつものだった。

商工業者の座は、発達した畿内の商品経済を背景として、鎌倉中期から荘園領主の保護のもとに全盛期に入り、あらゆる職業にわたって組織化された。薬関係ならびに近縁関係の主な座名を挙げると、次のものがある。

薬座：興福寺一乗院・施薬院・越後直江津、地黄煎座：典薬寮、水銀座：京都室町女院・伊勢丹生・藏人所、白粉座：伊勢射和・薄家、石灰座：興福寺大乘院、丹座：同上、藍座：三条家、青花座：薄家、雲母座：南御所、茜座：室町幕府、油座：離宮八幡宮ほか。

座の特権としては、課税の免除と職場・営業の独占が挙げられる。座の独占が本所である荘園領主の勢力範囲と一致するのは、その保護下で専売権を行使し得たこと、畿内先進区域という地の利があったこと、優秀な技術の独占があったこと、等が挙げられる。

荘園領主の応仁乱前後からの衰退にともなって、座の変質が起り、新興の商工業者群が各地に叢出して座の独占を新旧勢力が相争うとともに、商品別分化が著しくなって座数

も増加し、生産と販売の分離した座も現われるようになった。

戦国大名が領国を経営し、領国経済体制に入るにつれ、地方都市に活躍する商工業者は、これら大名の統制下に入り、多くは城下に集められて座に編成された。越前朝倉氏が城下の御用商人橘氏に薬座の支配権を与えているなどはその例である。

しかし一方、戦国も末期になると商工業の発展を妨げるものとして専売座制も撤廃にまで進み、まず城下町における薬市、さらに薬座の政策となるが、座は否定されても同業者団体はますます発達し、やがて株仲間を形成することになる。

このように中世薬史の研究対象として座の研究は重要である。座の研究については、豊田武『座の研究』(同著作集①)、吉川弘文館、1982などがあり、また同人著作集②③も中世商業や商人の研究に有用である。

中世の薬史は、かかる国内体制の進展と中国から新来の宋医学により一大転換をとげることになる。

日宋通交と医薬

古代が国家間朝貢に特色づけられるとすれば、中世は商人と僧侶を荷担者とする貿易と宗教が通交の性格を決定づける。

『薬種抄』ほか 天台・真言密教系新興教団の興隆にともなう修法用香薬類需要の増加は、香薬の研究を仏教界内部に生み、『香字抄』を先蹤とする『薬種抄』、『香要抄』、『香薬抄』などの諸抄の出現をみる。

これら抄者については、森鹿三の研究によって亮阿闍梨兼意とされ、抄者が利用した原典は、『重広補注神農本草并図経』(1092)と

『修文殿御覧』だとされ、中国でつとに亡佚したこれらの書物の復原資料としても注目される（森鹿三『文理図書館善本叢書・香葉抄・薬種抄解題』八木書店、1977）。

『本草色葉抄』 鎌倉期に惟宗具俊が撰したこの書は、題名の如く本草のイロハ辞典で、撰者が薬物の異名を知らなかったため、宮中で不首尾を喫したのを撰述の直接動機としていて、医療における薬物知識の充実を目的とただけあって、発音順で検索し易く、主治も重要なものには掲げられていて、本草辞典としては、平安初期の『本草和名』（深根輔仁撰）の不備を補って余りあり、最も新しい中国本草『経史証類大観本草』に據っている。内閣文庫蔵本が解説付で複製されている（石原明『本草色葉抄』解題、内閣文庫、1968）。

『喫茶養生記』 中国から茶種を将来し、南宋の抹茶の風を伝えた栄西撰のこの書は、仙薬としての茶と桑の医治効用を仏教系医学思想のもとで述べた養生書である。

本書には、承元2年（1211）正月稿の初治本と、3年後の建保2年（1214）修訂の再治本との2系統がある。

栄西が鎌倉幕府将軍源実朝に献じたとする『茶の徳を誉むる書』を、再治本系『喫茶養生記』とみる説と、茶の部分の抄出かともみる説があり、また『吾妻鏡』にみる献上日を、後日献上したのを同日の記事にまとめた類聚記事とみる意見もある。

栄西が本書を撰するに当たって参照・引用した文献については、森鹿三の詳細な考証がある。『白氏六帖』、『白氏文集』以外は、当時の百科事典『太平御覧』を有効に活用して、陸羽の『茶経』、『爾雅』など20数種を採用し、また一部には新しい本草書『証類大観本草』などの最新の薬物知識も取り入れている（森鹿三『茶道古典全集②、喫茶養生記解題』淡交社、1958）。

『馬医草紙』の薬草図 武士層の台頭による軍用馬の重視から生まれたこの有名な絵巻物

には、写実的な17種の薬草図が蔵っていて注目されて来た。しかし、それら薬草が何を意味するのかについての論及は長い間みられなかったが、これを「医王法薬」の処方薬を示したものとする三井高孟（『映像文化』28～29号、1968）の説によって、この絵巻物が馬医の伝授書としての位置付けが明確になった。

ちなみに、この薬草図の中に「色々」と名付け「毒散味」（どくだみ）の異名を付す薬草がある。

現称のドクダミは、漢名を「戢（シウ）」といい、平安期にはシブキの和名で知られる。このドクダミの語源については、毒を矯（グ）みする意（新井白石『東雅』）や毒痛（ドクイタミ）の意が（『大言海』として、決め手を欠いているが、毒散味の字がすでに鎌倉期のこの絵巻に使われていた以上、ドクダミは毒散味の意とするのが妥当であろう。もっとも、この絵巻にみえる毒散味の薬草は、今日のドクダミでなく、ハコベの類とみられるので、転用されたものといえる。

『和剂局方』と合薬

中国宋代の医療の民衆化に対応して生まれた『和剂局方』は、官撰処方集として数次にわたって増訂重刊され、ひろく普及した。

本書の性格を世界最初の「薬局方」と位置づけ、歴代の中国本草書を「薬局方」として来た先学の見解に批判を加えた長沢元夫〔薬史学雑誌、16(2)、1981〕の意見は、中国本草書の性格が materia medica であって pharmacopoea ではないとする外人学者の見解に一致する。

対明通交のさかんな室町期には、『和剂局方』をもとに、経済的実力を貯えてきた商工業者の手によって「合薬（あいぐすり、あわせぐすり、配合製廟）」を業とする者が現われるようになった。それは寺院にもみられた。

寺院における薬物加工生産は、一部は庶民のための施薬であり、一部は寄進者である戦国大名や富豪層への贈物として生まれ、「合

薬」はのちに売薬・頒薬として寺院経済をう
るおすことになった。有名な奈良西大寺の豊
心丹も、寺伝では鎌倉期の叡尊に由来づけら
れているが、室町期にまで下げるべきであろ
う〔宗田一『日本の名薬(売薬の文化史)』八
坂書房, 1981〕。

また一方では、相続く戦乱の世にあっては、
陣中薬製剤の簡便性が要求される。とくに振
出し薬で江戸期売薬として産後の血の道薬に
賞用された竜王湯や山田薬などは、戦国期の
陣中に貯えられた金創薬に由来をもつものだ

った(同上)。

なお、山田薬の由来については、拙稿：山
田流振薬考、日本の売薬(152)、医薬ジャーナ
ル25(9)、1989に新知見を提示してある。

このように、売薬製剤出現をめぐる問題は、
向後多くの掘り下げが期待される分野である。

さらに、中世における陳外郎(ういろう)
家に代表されるような渡来人の貿易・売薬製
剤も、中世史料の探究がさらに必要な領域で
ある。

【資料紹介】

ビデオ・医学薬学の父 ヒポクラテス

『重訂解体新書』で日本に初めてヒポクラ
テスの名が紹介されて以来160余年、昨年には
ギリシア語原典からの日本語訳ヒポクラテ
ス全集も刊行され、古代ギリシアの医聖ヒポ
クラテスは、一般の人々にも身近なものにな
りつつある。高度な医療技術開発が進む一方
で医の倫理が問われる現在、人間の自然性を
説いたヒポクラテスの精神に我々は常に立ち
戻る必要があると言えよう。

そんな中で、ユニークなビデオが登場した。
「医学・薬学の父ヒポクラテス——西洋医療
の源流をたずねて」である。

ビデオはヒポクラテスを核として、古代か
ら中世に至る西洋医療の歴史を概観しながら、
現代に生きる古代医療、日本における近代医
療の夜明け、大学病院での最先端医療など、
様々なものを映し出す。教養的な内容である
が、それだけに医薬史に限らず西洋文化史に
興味を持つ人にも楽しめる作品である。全編
を通して、医術への愛すなわち人間への愛が
繰り返し語られ、ヒポクラテスの生地コス島
や、医科大学発祥の地サレルノ等のロケーシ
ョンによる美しい映像は、人間の営みが今も
昔もそう変わらないことを示唆しているよう

だ。(企画・明薬資料館/監修:大槻真一郎)
カラービデオ全1巻(45分・台本付)

定価12,000円(税込)

問い合わせ先は 〒150東京都渋谷区渋谷2丁
目17-3南塚ビル新館7F ジェムコ出版株式
会社(電話 03-400-7737)

近刊科学史書 など

近年、歴史の見方がますます総合的になっ
てきた。例えば:

○伊藤俊太郎、村上陽一郎共編、講座科学史

全4巻 培風館刊

1巻 西欧科学史の位相

2巻 社会から読む科学史

3巻 比較科学史の地平

4巻 日本科学史の射程

○古川安著、科学の社会史、南窓社

○シリーズ〈世界史への問い〉全10巻

岩波書店

1. 歴史における自然、 2. 生活の技術
生産の技術、 3. 移動と交流

4. 社会的結合、 5. 規範と統合、

6. 民衆文化、 7. 権威と権力、

8. 歴史のなかの地域、 9. 世界の構造化、

10. 国家と革命

*

*

日本薬史学会1988年度決算

収入の部

	予 算	決 算	増 減△
前年度より繰越	1,232,836	1,232,836	0
賛助会費	780,000	760,000	△ 20,000
一般会費	1,185,000	670,000	△ 515,000
学生会費	2,000	8,000	6,000
外国会費	20,000	10,000	△ 10,000
投稿料	200,000	203,418	3,418
広告料	60,000	90,000	30,000
雑誌販売	10,000	2,000	△ 8,000
雑費	2,500	1,500	△ 1,000
利子	3,000	3,412	412
寄付	0	0	0
計	3,495,336	2,981,166	△ 514,170

支出の部

	予 算	決 算	増 減△
印刷費	1,750,000	1,779,669	29,669
通信費	100,000	85,630	△ 14,320
事務費	60,000	185,240	125,240
雑費	200,000	150,150	△ 49,850
計	2,110,000	2,200,739	90,739

繰越残 780,427

日本薬史学会1989年度予算

収入の部

	前年度	予 算	増 減△
前年度より繰越	1,232,836	780,427	△ 452,409
賛助会費	780,000	900,000	120,000
一般会費	1,185,000	1,200,000	150,000
学生会費	2,000	8,000	6,000
外国会費	20,000	20,000	0
投稿料	200,000	200,000	0
広告料	60,000	80,000	20,000
雑誌販売	10,000	10,000	0
雑費	2,500	2,500	0
利子	3,000	3,000	0
寄付	0	0	0
計	3,495,336	3,203,927	△ 291,409

支出の部

	前年度	予 算	増 減△
印刷費	1,750,000	1,550,000	△ 200,000
通信費	100,000	100,000	0
事業費		300,000	300,000
事務費	60,000	100,000	40,000
雑費	200,000	200,000	0
計	2,110,000	2,250,000	140,000

繰越残 953,927

90年度総会について

次稿にもありますように日本薬学会の110年会が札幌で8月に開かれることとなったので、本学会総会は4月上旬、独自に開催することとなりました。

現在企画立案中でありますが、90年1月末までには決定の運びとなりましょう。

日本薬学会第110年会
(札幌)について

1990年度の日本薬学会年会は、北海道札幌の地で、8月21(火)、22(水)、23(木)の3日間開催されます。

薬史学部会は中間の22日に設定される模様です。懇親会・ミキサー当日夜に開催される由。多数の会員のご参加を希望します。

なお、講演要旨は、3月17日(土)であります。

◇編集後記◇

地球規模で世界は大きくゆれ動いています。技術革新、情報革命の結果、もはや戦争は不可能となり、政治・経済のあり方も変わらねばならなくなった証拠です。

保健・医療の分野も変革が求められています。薬史学会の活動も、これらを反映させ、更に今後の方向を指摘する内容にしたいです。